

道徳部会 研究の構想（案）

令和6年度～

I 研究主題

道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める道徳科の授業はどうあればよいか。

—主として集団や社会との関わりに関すること—

II 主題設定の趣旨

社会の変化が加速度を増し、複雑で予測が困難になってきている。このような変化の時代において、学校教育には一人一人の生徒が自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるよう、その資質・能力を育成することが求められている。

学校における道徳教育は、自己の生き方を考え、主体的な判断の下に行動し、自立した一人の人間として他者と共によりよく生きるための基盤となる道徳性を養うことを目標とする教育活動であり、社会の変化に対応し、その形成者として生きていくことができる人間を育成する上で重要な役割をもっている。道徳教育の目標に基づき、道徳科で目指す道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てるためには、生徒一人一人が生きる上で出会う様々な道徳上の問題や課題を多面的・多角的に考え、主体的に判断し実行していく学習が必要である。「考え、議論する道徳」が必要とされるゆえんである。

本県の生徒の実態を全国学力・学習状況調査の生徒質問調査から見てみると、「人が困っているときは、進んで助けている」生徒の割合は9割に達しており、道徳的心情が育ってきていることが分かる。しかし、「道徳の授業では、自分の考えを深めたり、学級やグループで話し合ったりする活動に取り組んでいる」と答えた生徒が9割を超えているものの、全国平均を下回っている。これらの結果から、「考え、議論する道徳」に向けて改善の余地があることがうかがえる。

令和2年度までは「主として自分自身に関すること」、令和5年度までは「主として人との関わりに関すること」を副題として設定し、「多様な意見を引き出すための発問の工夫」や「考えの深まりを目指すための話合いの場の工夫」「指導に生かすための生徒と教師の評価の工夫」を視点として研究に取り組んできた。そこで、令和6年度から8年度までの3年間は、「主として集団や社会との関わりに関すること」を副題とし、研究を進める。また、「考え、議論する道徳」への転換を図るため、年次ごとの重点を「考え、議論する道徳」にするためにはどのようにしたらよいかという視点で設定し、研究を進めていきたい。

III 研究のねらいと内容

1 研究のねらい

主として集団や社会との関わりに関する道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める生徒を育てるための授業の在り方について、実践的研究を通して明らかにする。

2 研究内容

(1) 年次ごとの重点研究内容

2024年度（令和6年度）…「考え、議論する道徳」に向けた発問の工夫
2025年度（令和7年度）…「考え、議論する道徳」に向けた場の工夫
2026年度（令和8年度）…「考え、議論する道徳」に向けた授業展開の工夫

- (2) 道徳科の授業を構想するための方策
- (3) 道徳科の授業に生かす指導方法の工夫

道徳部会 令和8年度研究計画（案）

I 研究主題

主として集団や社会との関わりに関する道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める道徳科の授業はどうあればよいか。

—「考え、議論する道徳」に向けた授業展開の工夫—

II 主題について

令和6年度から、内容項目の四つの視点のうちの「C 主として集団や社会との関わりに関すること」を中心として、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める生徒を育てる道徳科の授業について研究を推進している。

令和7年度は、「『考え、議論する道徳』に向けた場の工夫」を副題に研究を進めたところ、日頃の学級経営や普段の授業によって、生徒が安心して学び合える環境がつけられ、そのような環境下での道徳科の授業においては、教師の発問や問い返しによって生徒の思考が促され、意見が活発に出されることが分かった。また、ねらいに即して、座席の配置を工夫したり、ペアでの対話やグループによる話し合いを取り入れたり、教室内を移動して議論を活発にしたりする工夫も効果的であった。しかし、「どうすればよいか」「このままでよいのか」といった行動の選択を迫るような問い返しが多かったり、授業のねらいや中心的な発問が、合意形成を図ることや意思決定を目指すような内容だったりする状況もみられた。また、終末の振り返りの在り方や板書の構造化についても課題が残った。

令和8年度は「『考え、議論する道徳』に向けた授業展開の工夫」を副題に設定する。道徳科の指導においては、生徒一人一人がねらいに含まれる道徳的価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、道徳的価値や人間としての生き方についての自覚を深めることで道徳性を養うという特質を十分考慮し、それに応じた学習指導過程や指導方法を工夫することが大切である。道徳科の学習指導過程には、特に決められた形式はないが、一般的には、導入、展開、終末の各段階を設定することが広く行われている。令和7年度に残された課題を踏まえて、学級の実態、指導の内容や教師の指導の意図、教材の効果的な活用等に合わせ、各段階で多様な工夫をすることで、生徒自らが望ましい人間としての生き方を追求し、道徳的価値についての見方や感じ方、考え方を深めるとともに、生徒が自らのよさや成長を実感できるような道徳科の授業を目指す。「人としてよりよく生きる上で大切なものとは何か、自分はどう生きるか」を考え、議論する道徳、つまりは「主体的・対話的で深い学び」の視点からの実践的研究を進めていきたい。

III 研究内容とその視点

内容項目の四つの視点のうち、「C 主として集団や社会との関わりに関すること」を中心とした道徳科の授業において、どのような学習活動を行うことで、自己を集団や社会との関わりにおいて捉え、物事を広い視野から多面的・多角的に捉える考えを引き出し、道徳的価値や人間としての生き方についての考えを深める授業となるのかを実践を通して明らかにする。そのためには、道徳教育及び道徳科の目標を基盤とした授業構想の在り方が重要な視点となる。また、道徳科の授業に生かす指導方法の工夫も同様に大切な視点となる。このような視点に基づき研究実践を行い、継続的な研究につなげていきたい。

1 道徳科の授業を構想するための方策

- (1) 道徳科の特質を生かした学習指導の展開
 - ・教材を吟味し、その教材でこそ目指すことができる具体的なねらいを設定する。授業で考えさせたいことは何であるのかを明確にする。
 - ・導入においては、本時の主題に関わる問題意識をもたせる導入、教材の内容に興味や関心をもたせる導入等、生徒一人一人のねらいの根底にある道徳的価値や人間としての生き方についての自覚に向けての動機付けとなるよう工夫する。
 - ・展開においては、教材に描かれている道徳的価値に対する生徒一人一人の感じ方や考え方を生かし、生徒が自分との関わりで道徳的価値を理解したり、物事を多面的・多角的に考えたりする場を設定し、自分の問題として受け止め深く自己を見つめるなど学習が深まる

ように留意する。生徒がどのような問題意識をもち、どのようなことを中心にして人間としての生き方についての考えを深めていくのかについて主題が明瞭となった学習を心掛ける。また、課題に応じた活発な対話や議論が可能になるよう工夫する。

- ・終末においては、学習を通して考えたことや新たに分かったことを確かめる、学んだことを更に深く心にとどめる、これからへの思いや課題について考える、等の学習活動が考えられる。生徒一人一人が、自らの道徳的な成長や明日への課題等を実感でき確かめることができるように工夫する。

(2) 教材と発問の吟味

- ・教師の教材の読み、解釈の深さによって、その授業の深さや生徒の学びの深さが決まると言っても過言ではない。以下の例のように教材を十分吟味し、授業を構想する。

一例 ①話の粗筋を把握する。(誰が何をどうした)

②内容項目を確定する。

③生徒に考えさせたい道徳的価値に関わる事項がどのように含まれているかを検討する。(その内容項目を考える上で、どのような意図があって、その場面や言動等が書かれているのか)

- ・生徒の思考を予想し、それに沿った発問や、考える必然性のある発問、多様な思考を促す発問、事物を多面的・多角的に考えさせる発問となるよう工夫する。
- ・読解で済むところは教師が説明するなどして、中心場面(中心となる問題)で考えたり話し合ったりする時間が十分確保できるよう留意する。

(3) 議論する場の工夫

- ・ねらいに即して、道徳的価値についての問題(道徳的価値が実現されていないことに起因する問題、道徳的価値についての理解の不十分さに起因する問題、道徳的価値を実現しようとする自分とそうできない自分とが葛藤する問題、複数の道徳的価値の何を優先すべきかという問題等)について議論する場面を適切に設定する。
- ・教師と生徒の一对一のやり取りに終わることなく、全体に対して問い返すなど、教師が進行役(ファシリテーター)となり、論点を整理して議論を進める。
- ・学校や学級内の人間関係や言語環境を整え、一人一人の生徒が安心して意見を述べ、互いに学ぼうとする環境づくりに努める。

(4) 指導と評価の一体化

- ・生徒の学習状況及び成長の様子についての評価と授業に対する評価の両面から評価を進めていくことで、指導と評価の一体化を図る。

2 道徳科の授業に生かす指導方法の工夫

(1) 言語活動の充実

- ・教材や体験等から感じたことや、考えたことをまとめ、発表し合ったり、討論等により感じ方、考え方の異なる人の考えに接し、協働的に議論したりして、知的活動だけでなく、コミュニケーションや感性、情緒の基盤を育てる。
- ・自己を表現し他者を理解しながら、互いに建設的な議論をする経験を通して、寛容の態度を育み、実生活での複雑な事象に対して他者と共に適切に判断し、行動する資質や能力を養う。
- ・言語活動を通して、互いの存在を認め尊重し、意見を交流し合う経験により、生徒の自尊心や自己肯定感を高めることも念頭に置いて指導する。

(2) 板書を生かす工夫

- ・板書は、生徒が授業の中で思考を深める手掛かりとなるように工夫する。
- ・思考の流れや順序を示すような順接的な板書だけでなく、違いや多様さを対比的・構造的に示す工夫、中心部分を浮き立たせる工夫等、教師が意図を明確にして板書を工夫する。
- ・生徒の考えを取り入れ、生徒と教師と共につくっていくような創造的な板書になるようにする。

IV 研究方法

- 1 研究主題を主体的に受け止め、各学校で日々の実践を通して研究主題の解明に努める。
- 2 各学校での実践資料や成果等を持ち寄り、各郡市、地区ごとに研究を進める。
- 3 各郡市、地区ごとに研究の視点を明確にし、研究授業、研究協議を通して、指導法の実践的研究を進め、主題の解明に生かす。
- 4 各郡市、地区ごとの研究結果を踏まえ、情報を交換し、次年度以降の研究に生かす。

